オイスカの植林運動

中野利弘

＜創立者の言葉＞

オイスカは昭年36年10月6日に生まれた。オイスカ運動のもとは創立者中野與之助氏が終戦後間もない頃から氏の考え方に賛同する人々を募った時に始まる。創立者は，世界はいよいよ狭くなり，人々が調和ある社会を築き平和的に共存するためには，心を一つにして努力しなければならない時代が間もなくやって来る事を説いていた。国内の体制が固まると次は世界中から心ある人々を招き，一連の国際会議を開催した。この国際会議を経てオイスカインタナショナルが設立された。多くの国々から，政治家，社会運動家，宗教家，実業家，学者などが多数集まった。日本に国際会議を招致しようなどとはだれも考えなかった頃の事である。各国から集まった人々はオイスカ創立会員となった。この先達たちは自分の国へ帰り，さらに多くの友人，賛同者を募りオイスカの組織を結成した。

創立者の提唱は，産業，精神，文化の促進というオイスカの名前に象徴されるように，調和ある豊かな社会建設のためには，科学技術に偏重することなく，精神的な教養と物の豊かさが相和して進まなければならないということである。しかし，現実の世界では．南と北の格差が次第にあらわになり，やがて南北問題という言葉が頻繁に使われるようになるときであった。各国の会員たちは，日本に優秀な農業技術があることに注目し，農業開発を指導してくれる技術者の協力を要請した。間もなく篤農家出身の農業技術者と青年ボランティアたちが，インド，パキスタン，フィリピンなどへ派遣され，やがてそのほかの国々へも開発協力が広まった。このような草分けの時代に，幾多の山を乗り越えたのは創立者の卓越した指導力によると言えるだろう。

創立者は農業開発協力が進むにつれて林業の重要性も常々述べていた。治山

NAKANO, Toshihiro : Love Green Campaign, OISCA's Way
オイスカ産業開発協力団

治水ということばが日本にある。農業の振興は水の確保からである。水を得るには植林をしなければならない。風水害を最小限に止めるためにも植林が大切である。近年地球環境問題が騒がれるようになり，植林の重要性が改めて注目されているが，植林には多くの意味がある。約20年前創立者がなくなる直前に，米寿を記念して出された氏の論文『農業の大教育』の『公害と植林』という章には次の記述がある。

「高度成長から一転して公害にふり廻されたわが国は，新たに公害闘争と言う言葉を生み，あくなきまでに企業の責任を追及し，はては政治問題まで持ち込んでいる。企業側としても，科学陣を動員して公害解消に努力されているが，これ以外の対策はないのであろうか。（中略）結論的にいうならば，山に木を植えよ，と言う事である。昭和47年9月，アメリカ合衆国を訪問した折，ワシントンの宿で，植林について話したのであるが，その心中には，公害問題も去来していたのである。人はややもすると，一つの問題が起これば．そこにのみ焦点をしぼり，その中で解決を図ろうとする。公害もまたそうであって，その責任を企業に押しつけ，政治問題とさえしようとするが，問題は，公害を生むに至った国土の環境全体に目を転じなければならない。その原因は，山の木を切りすぎ，植林を怠ったということにある。わが国が緑の日本列島と呼ばれ，その列島が山紫水明の国土であったということは，山脈や森林の作用がいかに大きな働きをしていたかということである。砂漠地帯はもちろんであるが，森林のない国土に住む国民がどれだけ悲惨なものであるか，その理由は，森林によって行われる風・雲・霧・雨などの循環順律が正しく行われないということである。したがって，わが国だけでなく，公害が騒がれる世界は，地球全体の新陳代謝が衰えたということであって，これを回復させる以外に公害解決の根本対策はないのである。」

＜1980年から本格的植林運動＞

農業開発協力を長年続けて来た技術者が，水が十分確保できないことが農業開発のネックであるが，それは山に木がないからで植林をやらなければいけない，と言い出した。それがきっかけでオイスカが本格的に植林運動を始めたのは昭和55年であった。その年にはスリランカで第7回アジア太平洋地域開発青年フォーラムを開催し，アジア太平洋緑化宣言を採択した。この青年フォーラムは昭和51年からタイを皮切りにアジア太平洋各国で実践してきた一連の青年の会議である。国際青年年の実現に大きな貢献をするなど，大いに意義あ

る成果を挙げたが，この1980年の緑化宣言で，アジア太平洋の青年が中心になり植林に力を入れる事の重要性が浸透した。

その年，タイの青年団体ガールガイド協会と共同で第1回の植林フォーラムを開催した。タイ国東北部のスリン県に約30名の日本人ボランティアが派遣され，ガールガイドのメンバーや現地の小中学校の生徒など約2,000名が一緒になって植林を行った。タイの東北部はこの国で最も貧しい地方として有名であるが，その理由は土地が非常に痩せているため産業の基本たる農業の振興が難しいことである。植えた木は70パーセント以上が枯死した。日本のボランティアはがっかりしたが，現地の農民は大喜びだったという。なぜならその一帯は今まで何を植えても育たないところだったからである。日本から珍しい人々が大勢でやってきて一緒に木を植えるなどということはタイの田舎の人々にとっては奇異な事であった。しかし交流行事など楽しくやれば賑やかでいい。地域の人々にとってはお祭りみたいなものだった。それだけに，それまで試みた事もない植林を心を込めて実行した所少し根付いたのである。日本のボランティアたちが帰った後暫くしてから補植を行った。この第1回タイ友好植林フォーラムに始まり，フィリピン，ネパール，タイ，インドネシア，インド，スリランカなどの各地で植林を実施してきた。

＜フィリピンの農林業プロジェクト＞

フィリピンでは，オイスカの技術員が常駐して植林に精出している。地域に行くとそこら中が禿山で植えるところには事欠かない。大体国や地方自治体の管理する土地に植えることになるが，場所によってはすでに農民が不法侵入して狭い畑をそこここで耕し生計を立てている。ミンダナオのディポログ市では，相談した所市長は不法侵入者は追い出すと言う事だったが，貧しいがゆえに住み着いた人々を追い出すわけには行かないので一緒に植林をやってもらい自分たちの森だという自覚を持ってもらったほうが良い，とアドバイスした。ミンダナオではこうしてプロジェクトが始まったが，同時に農業開発も平行して行った。住み着いた農民たちには食用作物，換金作物の栽培技術を指導し，総合的農林業プロジェクトとして発展してきたのである。かつて禿山だった一帯が森林となり，人々があちらこちらから集まって村ができている。決して豊かではないが，木もない鳥や獣も少ない草だらけの山だった所が森で覆われて，今日人々の生業があることは，小さな一歩であるけれども前進には間違いない。

＜海辺の植林＞

昭和59年からマングローブの植林を始めた。多くの途上国ではマングローブ林を切り払い蝦の養殖池を作っている。以前は蝦の養殖は簡単なことではなかったが，次第に技術が確立され急速に広まって来た様子である。現地の金持ち，あるいは先進国の資本家が投資するには格好の事業であるが，貧しい漁民にとっては環境破壊の影響を直接受ける分まったく被害甚大である。マングローブ林はサイクロンなどによる風水害をかなりの程度まで防いでくれる。とにかくどこも切り過ぎてしまったので再植林は重要である。これも日本からボランティアが現地を訪問して，現地の人々と一緒になって，まるで田植えをするように潮が引いた時に一斉に苗を植える。フィリピンの各地では少しずつ，しかし着々とマングローブ植林が続いている。

平成元年には沖縄で，政府，国際機関，NGOの3者協力を推進するためのアジア太平洋開発会議を開いた。開発も環境保全活動も，政府，国際機関，NGOがそれぞれ個別の努力をするよりも相互に協力すればより大きな効果が上げられる。沖縄会議ではオイスカの研修生OBが政府や国際機関の援助でいかにして現場レベルのプロジェクトを推進するかという議題が中心であった。この会議の結果，アジア開発銀行，フィリピン政府，オイスカフィリピン帰国研修生会の3者によるマングローブパイロットプロジェクトが実現した。平成2年より約2年間かけて，ネグロス，パラワン，ミンダナオで約250 haのマングローブを植えた。平成4年3月までに予定していた事業を完遂したが，帰国研修生たちは，次のマングローブ植林プロジェクトを実施できる機会を心待ちしている。

＜風水害を防ぐマングローブ＞

昨年バングラデシュは大規模なサイクロンに見舞われ数十万人の人々が死んだ。バングラデシュは，西の海岸はスンダルバンと呼ばれ，まだ鬱蒼たるマングローブの林がある。有名なロイヤル・ベンガル・タイガーが生息する所で

写真-1 マングローブ植林（フィリピン，ミンダナオ）

ある。人々にとってはこのような自然と共生することは，ある場合には非常に危険である。だからこそ昔から森林は切り払うものであったことは想像に難くない。東の海岸はマングローブをあらかた切り払って，所によっては資本家の手っ取り早い収益につながる蝦の養殖場が作られてきたが，しかしサイクロンに襲われると，マングローブがない所程被害が大きくなることに気付き始めた。また，ここの人々も地球温暖化について心配している。南極，北極の氷が解け海水面が上がれば真っ先に被害を受けるのは三角州の低地国であるバングラデシュのような国である。しかし，マングローブは上流から流れてくる土砂を止め．沿岸の海底を少しずつ上げていく働きがある。自然の中の蝦，蟹，魚のふ化を助けて沿岸の漁業資源を豊かにする。大きな資本を投じてつくった養殖場などに縁のない地域貧民にとって，マングローブは豊かな生活資源である。

バングラデシュの南東部海岸地帯の，チッタゴンやコクシバザールでは，オイスカの帰国研修生が中心となって，マングローブ植林が始まった。中心となっているのは，サイフル・イスラム・チョードリー君である。彼は日本に蝦養殖の研修にきた。チッタゴンではかなり裕福な家に生まれ資産もあったので，蝦養殖の事業を始めたのだが，今度のサイクロンで池がすっかり破壊されてしまった。一念発起マングローブ植林をはじめたというわけである。ここで指導をしているのはオイスカバングラデシュ研修センターの岡村郁男所長である。8年ほど前バングラデシュに派遣されて以来，男子農業研修センター，農村婦人研修センターの所長を勤めて，顕著な実績を上げて来た。バングラデシュのような最貧国は，植林はなかなか難しい。陸地の方は土地が狭く人口が密集しているため植林の用地はない。ちょっとした空き地も山羊や牛が入り，植えた苗木は全部食べてしまう。海辺の植林は土地はあるといっても直ぐにお金になるものでもなく，やはり何か特別な理由か，村全体とか国を考える度量がなければやれるものではない。サイフル・チョードリー君は幸い裕福な家に生まれたのでそのような見識を持つ下地があったと言えるだろう。本来行政も力を入れるべきであろうが政府指導部も担当者にもそんな気力はない。人がやる気を持つ事が最も重要である。

＜相手の自助努力に期待＞

インドネシアでマングローブ植林フォーラムを始めたのは平成2年の事である。オイスカ東京支部会員の強い支援があり実現へと進んでいった。ちょうどこの年，東京とジャカルタ市が姉妹提携を結び，何か建設的な事業はないかと

探していたとのことである。オイスカのメンバーに多くの都議会議員がおり，このメンバーを通じて東京・ジャカルタ友好マングローブ植林フォーラムが推進された。1年目は東京都から補助金を受けたが，2年目以降オイスカメンバーの貢献と，郵政省ボランティア貯金の補助を受けることとなった。しかし，実施にあたっては，多くのオイスカメンバーが日本から参加し，現地の人々と一緒になって一本一本丁寧に植えていることがその基本である。交流とボランティア活動が一緒になって，相互の理解を促し，効果的な協力関係が樹立されていると言えるだろう。

この様な植林フォーラムを実施するにあたっては，日本からの持ち出し経費は最小限に止めるよう努めている。日本が協力するとなると現地側は資金をいかにたくさん引き出すかに知恵を絞るようである。そういう習慣になっているようでもある。インドネシアと始めたときもまさに相手の大きな期待を実感させられた。とくに大東京の行政から補助金が出て，大勢の都議会議員が一緒にやってくるとなるといやが上にも期待は大きくなる。実施の枠組みを決めるのに苦労したが，最終的にはこちらの意図を分かってくれた。結局この事業は長期的に見てインドネシア側の利益になることである。日本が目先の利益を考えてわざわざジャカルタまで飛んできて植林するのではない。まして個人的な利益を求めての事業でもない。要はインドネシア側の自助努力を促すのが最終目標である。インドネシアのどういう人でもいいから，このような仕事に一肌脱いで取り組んでやろうと言う意思が生まれて，それを回りがサポートする環境ができれば良い。その方向に向かって小さな歩みではあるが毎年努力を重ねている。

＜子供の森＞

平成3年より，『子供の森』計画を始めた。これはフィリピンに長年滞在しているオイスカ技術員が提案したのが始まりらしい。日本ではフォスター・プランと言う途上国の子供に先進国の市民が学資を送る制度が有名になっていた。民間の公益事業は常に資金を

写真-2　子供の森（フィリピン）

写真-3　植林フォーラム（ネパール）

どこから調達するかが第一の問題となる。継続的に安定した協力活動を行うためにはそれだけ先進国市民の理解と協力が必要である。オイスカの植林事業をさらに充実させるためには新しいシステムをつくる必要があることをだれもが指摘していた。

子供の森計画はいろいろな形態の植林事業の中の一つであると言えるが，多くの意義を持っているようでもある。まずこのオイスカ技術員は，途上国においては，植林をするという習慣も観念もほとんどない事を考えた。日本からやって来て一緒に木を植える。行政が深く関わるのでその意味では植林フォーラムの意義は大きい。例えばフィリピンのネグロスのバゴ市長マヌエル・トレス氏は，オイスカがマングローブ植林フォーラムを始めて直ぐに行政でもやるよう指示を出した。市として植えやすい場所があったのだろうが，約 40 ha を直ぐに植えてしまった。それから植林フォーラムでは日本から若い人がやってくる。日本のように豊かな社会の中で，貧しい事や，ひもじい事，不便な事を知らない人々にとっては，途上国におけるボランティア活動は実に効果のある環境教育，開発教育である。その活動はすでに 10 年やってきた，しかし現地の人々が本当に木を植える習慣，木の大切さ，環境の大切さを理解するためには何が必要だろうと考えた。最終的には，考え方がまだ柔軟で吸収力のある子供を対象にするのが良いのではないかという結論に達したという。

今，日本では一口 1 年 5,000 円の支援者を募っている。フィリピン，タイ，マレーシア，バングラデシュ，ネパール，スリランカ，インド，タンザニアなどでは今まで約 200 校近くの参加小学校が認定され，そのうち 144 校で子供の森プログラムが実施されている。学校近くの空き地，山を学校林として定める。このような土地は行政などから借り受ける場合もある。そこに子供達が木を植え管理する。5 年継続し，次第に学校林を広める。子供達も卒業するまでには木の意味をしっかり身に付けるわけである。木を植えてもらうと同時に文房具を少しずつ送って学業の助けとしている。さらに優秀な子供には進学の機会を与えて行く計画がある。もし十分な資金的援助が得られれば日本などに招

写真-4　植林フォーラム（タイ，スリン）

聘して将来優秀な林業技術者，あるいは緑化を進める行政担当者として基礎的な学問をする機会を与えたいと考えている。

今までのところこの計画は順調に進んでいる。子供達は日曜日にも学校に来て，水をやらなくて良いのかと聞く。子供達になぜ木を植えるのかと質問すると，木は水を蓄えて，山崩れを防ぐからと答える。山にも海辺にも木を植えるが．子供達は明るく，楽しく植林をやっているようである。年に2回ぐらい子供達から支援者にお礼状が届く。その中には素直な気持ちが無邪気に表現されている。

＜教育としての植林運動＞

オイスカの活動については，地域開発，人材教育，農林水産業開発，教育，環境など，様々な言葉で表現している。自然との調和，大自然への感謝，自然の循環順律への順応などが基本的精神である。これらの考え方は創立当初からオイスカ理念の中に一貫して流れてきたものである。植林運動は，途上国の地域大衆の生活資材を生みだし，食糧を与え，農業漁業の発展を助け，土砂崩れや水害を防ぎ，林産資源を生み出すなど，多くの利益を意図して推進されるが，もう一つの大きな目的は相互の啓発である。人々がこの植林運動に参加する事は，このような大きな自然の循環順律について考え，個人主義ではなく，自分の村，町，国，あるいは世界の事まで考える機会を与えられる。

今度の地球サミットで南北の対立が以前にも増してあらわとなった。双方の立場は分からないでもないが，基本的には自分の小さな枠に囚われず大きな見地からものごとを考える姿勢が大事ではないだろうか。独り善がりの思想に囚われず，高い立場でものを見る努力が必要ではないかと思う。先進国の人々が

奉仕の精神で途上国で汗を流す事は，そのこと自体が途上国の人々を刺激する。途上国の人々が，近視眼的には何の得にもならないように思える植林に参加する事は意識改革のチャンスである。ある途上国の NGO 代表が，『自分も植林の重要性は分かる。だから村の人に呼び掛けて木を植えるけれども，地球温暖化防止のために木を植えているのではない。二酸化炭素の吸収林を途上国に期待するのはお門違いも甚だしい。先進国は自分で責任を取れ』と絶叫していたが，途上国でも地球全体を考える事はやがて翻って自分の利益となるのではないだろうか。

先進国の若者は自分のライフスタイルを考え直す良い機会である。日本などは物が溢れて，途上国の人々には想像もできない裕福な生活をしている。物を大切にするとか，他に感謝するとか言う気持ちは日ごとに薄れている。年寄りが物を大事にするよう教えれば，時代が違うと反発する。物を大切に使うという発想自体が貧しいものと考えているようである。そのような青年も開発途上国の農山漁村に住み込んで，不便な生活をしながら現地の人々と汗を流し，ボランティアを暫くやっていると，少し考え方が改まるようである。

＜これからの課題＞

人を動員する事に大きな力を注いできた。緑化，植林といっても，植えた木や面積はまだまだ少ないものである。多くの人々が，世界の森林は年間 1,800 万 ha も減少しているから少々植えたぐらいでは焼け石に水だと言っているようである。世界の植林，アジアの植林を，規模の面から考えるとオイスカの貢献は実に目に見えない点のようなものである。しかし，我田引水になるが，人への投資はやがて目に見える動きになるのではないかと期待している。今，アジア各国にオイスカの研修を受けた青年が数千人いる。いろいろな職業に就いているが，彼等の多くが地域開発，植林などのプロジェクトに参加している。大衆参加の開発という言葉が使われて久しいが，今後はオイスカもこのような帰国研修生の力を動員してさらに大衆参加プロジェクトを充実していかなければならないだろう。上下の格差の大きい社会制度のもとでは，グラスルートの研修生がリーダーシップを発揮する事はなかなか難しい事であるが，今日世界は急速に変わりつつある。高度な通信手段，マスコミ，そして西欧の民主化運動のお陰だろうが．途上国の権威主義的な政府や支配階級が後退しつつあるようである。はかばかしく進まない開発や貧困削減プロジェクトの現実を前に，途上国支配層も大きく変わらざるを得ない時にきているのではないだろうか。

地域に根差す帰国研修生たちが，さらに経験を重ねて，力強い指導力を発揮できる植林プロジェクトがさらに増える事を期待している。

オイスカは，昭和61年，62年にはそれぞれ東京，名古屋で世界NGOシンポジウムを開催し，国際機関，政府，NGOの三者協力を提唱した。その後64年にアジア太平洋開発会議が開かれ，フィリピンにおける，アジア開発銀行，フィリピン政府，オイスカ帰国研修生の3者によるマングローブ植林プロジェクトが実施されたのは先に述べた通りである。実際，政府・国際機関・NGOがそれぞれ独立にプロジェクト，プログラムを営むより，3者が足りない所を補完しあいながら相互協力したほうがより効果的である場合が多い。昨年6月の地球サミットに参加して，環境の分野でも3者協力がいよいよ重要視されるようになるのではないかと感じた。オイスカの植林事業では，帰国研修生の活動が益々大きなウェイトを占めるようになるだろう。日本から多くのボランティアを動員して数日の植林フォーラムを実施する事は意義があるが，同時に帰国研修生に機会を与え，その力を大いに活用する事を考えたい。以前は自分たちで力を合わせる事がなかなかできない様子であった帰国研修生も，日本で学んだチームワーク，責任感，規律など，良いところを発揮する力を少しずつつけて来たようである。その中心になる指導力のある人材が育って来たともいえるだろう。先の子供の森計画もこの帰国研修生が大きな役割を担っている。